

優秀賞

「酪農のあり方を考える」

明治大学
農学部農業経済学科 3年 幸山 明良

まず酪農について述べる前に、私がなぜ酪農に興味を持ったのか、その心の内を記すとする。そこから私が酪農を例として、農業の本来のあり方を説明し、その上で、将来の展望を伝えたい。

幼い頃から動物が好きだった私は、中学生まで動物園で働きたいという夢を持っていた。しかし、動物園の動物たちは、狭い檻の中で一生飼われ、人間の欲望を満たす見せ物でしかない。そんな動物たちの目は死んでいるかのように見え、次第に動物園で働きたいとは思えなくなっていった。そんな中、農業という職業は、自分の価値観をそのまま活かせる経営が出来るはずだと思い、普通高校を卒業後、岐阜県農業大学校へ進学することを決めた。ここからが、酪農に魅せられた男の始まりだ。

私が酪農に興味を持ったのは、岐阜県農業大学校へ進学し、校内の牛舎を見た瞬間だった。どんな牛舎だったかと言えば、狭く薄暗い中に、牛1頭しか入ることができないベッドが20個ほどあり、そこには首輪を着けられ元気がなく横たわっている牛たちがいた。しかも牛舎の中は非常に臭く、5分もいたら嘔吐しそうなぐらいだった。その時私は、今までイメージしていた放牧主体の酪農とは程遠いことを知り、ここで飼われている牛は「地獄」のような環境で生きているのだと感じた。また同時に、毎日飲んでいる牛乳も疑ってしまった。この経験から、人はどこで動物愛護と家畜の線引きをしたらいいのか、牛にとって理想的な酪農経営とはどんなかたちなのか、そんなことを考えながら、私はどうにか人も牛も無理をしないで済む経営が出来ないかと思い、徐々に酪農にとりつかれていった。

そこで私は、地元の酪農家を訪れたり、北海道の大規模経営を行っているところへ視察に出かけたり、芝草地を見に隠岐島まで行ったりと、私が理想とする酪農のスタイルを捜し求めた。しかし、多くの酪農家たちは、経済効率重視の考え方で、規模拡大や品種改良にしか酪農の価値を見てはいなかった。だから私は、そんな酪農家を見て経営者としては立派であるが、牛飼いとして見れば、どこか違うように見えてならなかった。なぜなら、農業ではなくなっているように見えたからだ。いかに効率よく肉や乳を生産できるかという品種改良は、抗生物質やホルモン剤を過剰に投与する、人間にとって都合の良いロボットのような弱々しい病弱な牛をつくりだした。また、経営の合理化を追求するあまり、人間にとって都合の悪いロボットたちはすぐに廃用とされ、生き物だという認識を忘れさせてしまった。これでは、はっきり言って農業ではなく工業である。そんな現状に私は強い憤りを感じた。

ある時友人に、「そんなに酪農が嫌なら止めたら」と言われた。事実その頃の私は、酪農に対して前向きな姿勢で取り組みなくなっていた。ただ、その一言で、なぜ自分が酪農に

対して、こだわっているのかを追求してみると、単純に動物が好きだったこともあったが、酪農は生命産業であるという魅力を感じていたからだ。多くの人々は、牛の出産や死を体験することで、命のあり方や感動、喜び、悲しみなどを感じ、考え、生命の魅力に憧れる。しかし私の場合は、このような生命にも魅力を感じるが、酪農の一連のサイクルにも生命を感じている。どういう意味かと言えば、人は牛を飼うことで、その肉や乳によって生かされる。そして、家畜の糞尿は土の肥やしとなり土地が生かされる。さらに、その土地で牧草が生かされ、その牧草で牛が生かされる。このように廃棄物を出さずに循環できる産業は工業にはない魅力を生み、すべての環境とつながっている“共生”という生き方が生命産業の魅力であると私は考える。だから私は、酪農が好きなのだ。

ところで、近年の農業は私の考える生命産業としての性格を失いつつある。その背景には、日本や欧米諸国のように、貨幣価値でしか農業の魅力を映し出さなくなってしまう現状があるのではないだろうか。その結果、農業が生命産業ではなく、工業のような無機的な産業となっている。そして、その影響を特に受けたのが酪農業だと思う。

このような農業のあり方は、実は社会からの影響によってもたらされたものであり、私はそうした社会を批判したいのである。その社会とは、具体的には消費者の誤った行動と、消費者が生産者を理解していないことに代表される。まず、私が批判する誤った消費者行動とは、消費者が農産物に対して1円でも安い農産物を手に入れようとするることである。つまり、質よりも価格を重視し、「食」を軽視している。面積が小さく山地の多い日本では、大規模生産によって他国より安く農産物を供給することは難しい。その結果、消費者は外国産の安い農産物に依存し、日本農業も無理に安い農産物を作るために無機的な産業となってしまった。2点目に、消費者が生産者を理解していないとは、消費者が生産者の暮らしを理解していないということだ。要するに、価格より質を重視して作っている農家の暮らしは貧しい。その理由は、「あくまで農家は作ることが仕事であり、販売することが目的ではない」という、一つの農産物に懸ける思いがある。そのため、消費者が生産者の農産物を作る“思い”や“考え”を理解しなければ、その農家は生計を立てられず、多くの場合自己満足で終わってしまう。つまり、いくら品質にこだわった農産物を作ったとしても消費者の理解が無い限り農家の生活は成り立たない。それは、多くの消費者が農産物に対して質よりも価格でしか判断できないという一つ目の問題とも関連する社会がある。だから日本農業は、工業のような無機的な産業となり、経済効率重視の経営にならざるを得なくなっているのだ。

では、どうすれば“命”を感じながら、安定した所得を得られる経営ができるのだろうか。また「食」の価値が価格以外で判断できるのだろうか。その答えは、農業大学時代を訪れた、高知県南国市にある「山地酪農」を営む斉藤牧場にあった。私は当時、牛にストレスをかけない方法は、どんな経営が相応しいのだろうかと考え、その方法を放牧酪農に絞って

勉強していた。そこで、出会ったのが「山地酪農」だった。斉藤さんの経営は23haの土地に24時間放牧し続ける低コスト低収入型の経営だ。私は、そこで3ヶ月間研修することとなり、経営のノウハウを学ぶと共に、牛に対する思いを勉強した。放牧場は、山を開墾したため、傾斜のすごいところでは40度近くにもなる。それなのに牛たちは牛道をつくり、軽やかに動き回っている。腹が減れば芝を食べ、眠くなれば腰を下ろしてゆっくりと眠る。まさに、牛にとっての自由な世界がそこにはあった。

一方、斉藤さんの暮らしはどうかと言えば、決して豊かな生活をしていただけではない。ただ、牛同様、時間に追われることはなく、放牧がほとんどであるため、牛に出来ることは牛にやらせてもらうという暮らしである。また斉藤牧場では、月一回、消費者との交流会を開いている。その内容は、斉藤牧場の牛乳が、どんな形で生産されているのかを消費者に見学してもらうことだ。また、普段食べているものには、一つ一つに命があることを理解した上で、“命”の恵みを頂いていることを実感してもらう。このように斉藤牧場は、牛にも人にも優しい、どこか温かい雰囲気ではしゃいぶの牧場であった。わたしにとって理想的な牧場である。

今日、世界中で食糧難が危惧されている。そんな中、多くの食料を効率よく、安く供給することは、非常に大切なことだ。しかしながら、農業が持つ本来の良さを忘れてはならないはずだ。その意味で「山地酪農」は非効率で非合理的な経営かもしれないが、私はこれからの農業に必要であると考えます。もしこの経営が消費者一人一人に理解されることができれば、規模拡大だけにすぎることなく、農業が持つ本来の良さを発揮できるはずだ。そのためにも、私は斉藤牧場のように消費者と生産者の距離が近い関係であり、牛にも人にも無理をしない経営をこれからは築いていきたい。

そして、将来の「食」を自信を持って届けられるような生産者になりたい。これが、私の酪農に対する思いとこれからの生き方だ。
